

入選

シマトネリコ

山口県 由宇中学校
一年 花田 柚菜

今年も暑い夏を迎えた。

昨年に比べ、肌を刺す陽は優しく、日焼け止めは一本で済みそうだ。祖母から、昔はこんなに気温は高くなく、田舎は、高層ビルが建ち並ぶ都会よりもさらに過ごしやすい夏だったと聞いた。

生まれてから 13 年。40 度近くにもなる猛暑。私にはあたりまえの夏休み。

玄関のとびらを開いた瞬間、眉間にツンと差し込む光。眉をひそめながら飼い犬の世話から始まる一日。セミの合唱が心地よい。鳴き声のにぎやかさで、その日の天気が良いことがわかる。それに加え、鳥のさえずりがひびきわたり、やる気のスイッチも切り替わる。

飼い犬の世話を終え、ふと足元のコンクリートに目をやると、アブラゼミがあお向けに転がっている。死んでしまったのか、ピクリとも動かない。ゆっくりとしゃがみこみ、手のひらに乗せてみた。少しではあるが動いている。寿命が残りわずかなのだろうか。確実に弱ってはいるが、死んではいない。

セミは土の中で約 5 年から 7 年過ごす。そのあと、地上へとはい上がり、ふ化する。最近の研究では、地上では数週間から 1 ヶ月程度、生きるのではないかともいう。

ボーッとながめる間、いろいろなことを考えていた。

この世に生を受けたものは、遅かれ早かれ、必ず訪れる死。私はこの最期の瞬間に、何度も立ち会ってきた。どんなに小さな命さえも大切に……。生まれてきてはいけない理由など、なにもない。手の中で、今にも消えてしまいそうな命のともしびにできる最期の「親切」。それは、見上げた先のシマトネリコの「小さな」小枝へ、そっと返してやることだった。

「小さな親切」とは何か……。困っている人に手を差しのべる勇気、互いに支え合う「優気」。人から人へ、人から動物へ、動物から人へ、強い生き物だけが勇敢とは限らない。そして、なにかをしてあげることだけが親切とも限らない。この世に生を受けたことこそが、誰かへの「大きな新節」になっていると……。

そして、この作文のテーマ、「小さな親切」ってなに？ 誰かへの手助けとか？……と、つぶやく私へさらっと母は言った。

「生まれてきたこと、あなたの存在が私への親切。」だと。

誰かの存在が、日々誰かの幸せとなり、糧となる。だからこそできる「小さな親切」へとつながっていくのだと、母から気づかされ、そして小さなセミから学んだ。

また一つ成長できた 13 歳夏、来年もヨロシクねと、シマトネリコを見上げた。